

総評

全国小・中学生障がい福祉ふれあい作文コンクールは、この度11回を迎えることができました。ご応募いただきましたすべての生徒の皆様、作品の募集にあたってご尽力いただいた都道府県協会の皆様、本コンクールの趣旨にご理解・ご協力をいたいた小・中学校の先生方に心より感謝申し上げます。

豊かな感性をもつ児童期の子どもたちから、今年もたくさんの方の作文が寄せられました。障害当事者や兄弟姉妹から深い感情体験を通した、社会に対する鋭い意見が綴られた作品も多く寄せられていました。立場の弱い人にに対する思いやりや其感性の高さは、この時期の子どもたちが持っている、特別な力です。いつの間にかこうした感情が薄らいでしまう大人にとつても、本コンクールへの応募作品が教えてくれることがたくさんあるのではないかでしょうか。こうした体験の共有は、社会を構成する私たち一人ひとりが「社会の在り方を考える」ために必要なものです。

私は、小学校にはほとんど通えませんでした。入学式を終えたすぐ後に病床に伏すようになり、丸4年間自宅の布団の上で過ごすという体験をしました。倦怠感と吐き気が止まず、少し立ち上がるのも苦しく、常に洗面器を傍らにおいていました。ただ一人、雨や風の音を聴き、天候の移り変わりを感じておりました。こうした日々での愉しみは、長兄が初めての給料で買ってくれたラジオから流れる童謡や民謡を聴きながら外の世界に思いを巡らせることが、次兄が毎週学校の図書館で借りててくれる本を読むことでした。私は福祉の仕事に就いて50年になりますが、この時の体験が今に繋がっているかもしれません。

普段の暮らしの中で、ふと心に浮かんだこと、感動したこと、気が付いたことを心に留め、よく考え言葉にして伝えてください。それは社会を変える力になります。本作文コンクールがそのような表現の場としてこれからも広がっていくことを願っています。

公益財団法人日本知的障害者福祉協会

会長 樋口 幸雄